

オール電化・雨月物語

青柳碧人

キビツの釜

1.

空^あいている左手でがさがりと生い茂る葉をかき分け、伊沢正太郎^{たろう}は傾斜のある山道を逃げる。もうここが道なのかどうかもわからない。

ぐるろろう！

獣の咆哮^{ほっしょう}は二十メートルほどに迫っている。ぎらりと光る目と、鋭利^{えいり}な牙を思い出す。あんなのに襲われたら大変だ。

体力には自信があるとはいえ、こんな道をいつまでも走ってられない。早く、ログハウスにたどり着かなければ。

「おっとー！」

右脇に抱えた電気釜を取り落としそうになった。ふつつつと、中で米が焚^たきあがりつつある感覚が伝わってくる。蒸気が出てくるわけでもなく、外側に熱が放出されるわけでもないが、本当に邪魔だ。

ぐろろろおおう！

敵は近づいてきていた。体長は三メートル、いや、四メートルぐらいあっただろうか。速度もあり、このままではすぐに追いつかれてしまう。どこか隠れて気配を隠したほうがいい。どこかないだろうか。

「あいた！」

正面に生えていた木にぶつかって尻餅しりもちをつく。よそ見をしていて、気づかなかった。

「えっ？」

自分のぶつかったそれを見て、正太郎の体から血の気が引いた。節ちやかつしよくくれたった茶褐色の柱……木ではなかった。根の代わりに、鎌のように鋭利な爪が大地をがちり踏みしめている。その爪の周囲に何枚も、うちわ程もある赤い羽毛が散らばっている。

おそろおそろ目線を上げる。

木々の間に、燃えるように真っ赤な羽毛かたまりの塊があった。にょきりと伸びた首の上に、濡ぬれたくちばしと黒曜石こくようせきのような眼玉があつて、正太郎をしっかりと捉えている。

クキヤアアッ！

鼓膜こまくを破らんばかりの鳴き声とともに、正太郎は蹴くとばされた。

「ぎゃあっ！」

幸い、爪に傷つけられることはなかったが、体は右の急斜面のほうに飛ばされた。枯葉かれはを舞い上げらせながらごろごろと転落していくうち、口と鼻に土が入ってきた。

気づくと正太郎は、日の当たる平坦な場所に仰向けになっていた。気を失っていた？ 慌てて身を起こす。二メートルほど離れたところに電気釜がきちんと足を大地につけていた。

「あぶねえ！」

飛びついてそれを抱きかかえる。

クキヤアという鳴き声が頭上遠くから聞こえた。見上げれば、ほとんど崖のような急斜面が数十メートルそびえていた。

「あんなところから落ちたのかよ……」

体のあちこちが痛い、骨が折れている様子はない。

図体はでかいが飛べない鳥と聞いている。追いかけてくることはないだろう。とはいえ、道を見失ってしまった。電気釜のデジタルタイマーを見ると、【炊飯 20分】となっている。

あと二十分で目的地を探し当てたどり着けなければ、袖未そでみは……。今さらながらに運命を呪う。どうしてこんな辺鄙へんぴな孤島で、怪物のような鳥獣に追い回される羽目になってしまったのか。

一年。たった一年で、俺の運命は変わってしまった。

ふと、背後を振り返る。開けた草原の中にぼつりとプレハブ小屋

がある。何かの荷物置き場だったのだろうか。壁はつる植物に絡みつかれているが、扉は開きそうだった。

嘆なげいていてもしょうがない。あそこに地図があるかもしれない。

額に浮かんだ汗を袖で拭きながら、正太郎はプレハブに向かって歩きはじめた。

2.

「しっかし、えらい男前じやな」

毛虫のような眉毛のその男は、正太郎の顔を見てがははと笑った。

笠田幹夫かさだみきお。日本で知らない者などいない《CASA DA 運送》の創業者である。

「こりや、婿むことしては上々じゃけ。のう、衣空いそく。お前も気に入ったろう」

衣空と呼ばれた娘は、父親の右隣で恥ずかしそうに目を伏せたままだった。口数の少ない、つまらなそうな女だというのが、正太郎の第一印象だった。そのさらに右隣で、笠田の妻はくすりととも笑わず正太郎の顔を見つめている。

「お宅の衣空さんも、おしとやかで素晴らしいですな」

正太郎の父、伊沢貞三いざわていざうが心にもないお世辞を言う。お前の趣味は

もっと派手なコスプレ女だろうが……見合いの席でそんなことはもちろん口にしない。

「似合いのカップルじゃけえ、のう、テツヤ」

「おっしゃる通りですけ、社長！」

背後に控えている三人のスーツ男のうち、左端にいるオールバックの男がどすの利いた声で応じた。笠田の私設秘書だというが、舍弟のようにしか見えない。

実際、笠田が「物流やくざ」と陰で囁ささやかれていることを正太郎は知っていた。

十八歳で広島市に本社を置く物流会社のトラック運転手になったが、度重なる労働基準の変遷へんせんに嫌気がさしてオペレーションに転身、おりから向上してきた自動運転システムに目をつけて《C A S A D A 運送》を起業した。

彼が開発したS S システムという物流形態は、有人大型拠点のステーションと、無人小型拠点のサテライトから構成される。各サテライトに集まった荷物は中型トラックでステーションに運ばれ、分別、再積み込みされる。その後、自動運転コンテナによってステーション間を移動し、再び各サテライトに分配される。このあいだはすべて機械制御である。

画期的なのは、サテライトから個々の配送先への配送を社員には

やらせないという仕組みであった。サテライトに運ばれた荷物は鍵付きロッカーに分配され、顧客にはそのナンバーとパスワードが送られる。顧客は自分でサテライトに足を運び、荷物を回収して持つていく。

不便なようにも思えるが、人件費や燃料費は大きく削減され、競合他社の半分以下の配送料を実現した《CASA DA 物流》のやりかたは世に受け入れられ、創業一年で配送範囲は広島県内から中部地方全域に拡大された。勢いづいた笠田はさらに自動運転船の導入によって瀬戸内から四国・九州に進出し、五年後には日本全国にCASA DAのコンテナが走るようになった。

大酒のみで、趣味は釣りに狩猟しゅりやうだという豪快さ。毎年正月には全社員を広島の本社に集めて新年会を開くことも有名だ。

「おどりや、怠なまけとるとしごうしちやるで！」
年初めのスピーチでは必ず怒号を放ち、社員たちを一時間叱咤しったしながら気合をいれるのが恒例となっている——というのを、正太郎も企業特集の映像で見たことがあった。

そんな笠田幹夫の娘との見合いの話ことばを父の伊沢貞三が持ってきたとき、正太郎は天地がひっくり返らんばかりに驚いた。

「お前こじももういい年なんだから」

固辞こじする正太郎を、貞三は静かに、しかし確実な威圧感をもって

たしなめた。

貞三もまた、成功した企業人である。

代々肉牛の飼育と出荷をする《イザワ畜産》を経営する家に生まれたが、飼料の高騰、廉価な外国産牛肉、家畜伝染病などのリスクに悩むのが嫌で、思い切って牛を手放し、畜虫業に転じた。

環境問題が深刻になるにつれ、世界的に昆虫食の需要は高まってきていた。コオロギ、バッタ、トンボ、タガメ……かつては多くの人が食べるのに抵抗感を持っていたこれらの昆虫も、政府の食育活動や大手昆虫食会社のインフルエンサーを使ったキャンペーンによって次第に受け入れられる素地が出来上がっていた。

幸い、貞三には広大な肉牛の放牧場跡があった。そこに巨大な飼育ハウスをいくつも建造し、会社名も《伊沢昆虫興産》と改め、あらゆる食用昆虫を飼育して出荷した。積極的に外国の昆虫食を研究し、マシユマロゼミやハニーカミキリをいち早く日本に持ち込み、昆虫食スイーツのブランド《SHOKKAKU》を立ち上げた。今やどこかのスーパーでも手に入るセミ味やカミキリムシ味のアイスは、もと貞三が開発したものである。

正太郎が生まれたときには、貞三はすでにこの国の名士の一人だった。忙しい父も病気がちな母も遊んでくれなかった代わりに、好きなものは何でも買い与えられ、不自由なく育てられた。勉強では

落ちこぼれたが甘い顔立ちが女性にはもて、東京の三流大学に進学してからは毎夜、湯水のように金を使って遊びまくった。卒業後は《SHOKKAKU》の関連企業にそれなりのポストを与えられたが、クビなどありえないので仕事そっちのけでやはり遊びまわっていた。

そろそろ人生について真面目に考えなければな、と思いはじめたのは三十を目前にした頃だ。きっかけは、母親の死だった。

お父さんもどんどん年を取るわ。あなた一人っ子なんだから、しつかり会社を支えてあげてね――

やせこけた顔で母は言い残し、旅立った。

しつかり会社を……そもそも仕事に真剣に取り組んだことのない俺にそんなことができるものか。真面目に考えなければと自分に言い聞かせつつ無気力さに包まれ、仕事にも遊びにも出ない日々が続いた。

今回の見合い話は、そんなときに持ち上がったものである。

《CASA DA 物流》の名や笠田幹夫のことはもちろん、知っていた。見合い相手はその幹夫の娘の衣空で、婿養子に入ることを希望しているということだった。

「綺麗な女性だぞ」

見合い写真を見せてくる。今時ご丁寧フォトスタジオで撮影し

たのだろうか。和服姿のスレンダーな女性だった。好みの顔立ちではなかったが、仕方ないか、と正太郎は思った。

父親のようなビジネスの感覚がないのを、正太郎は嫌というほど自覚している。このまま無能社員と後ろ指をさされながら生きていてもしょうがない。それよりは勢いのある企業との関係を作る駒こまとして機能したほうが、親父の会社のためにもなるだろう。

「失礼します」

ストライプのスーツに身を包んだ目つきの鋭い男が入ってきた。なぜか両手に古臭いものを抱えている。

「ご苦労じゃったの、カンタ。ここに置け」

「はっ」

笠田に命じられた通り、彼はそれをテーブルの上に置き、さっ、と頭を下げて出ていった。貞三が怪訝そうな顔をした。

「電気釜ですか？」

「おお、そうじゃけ」

たしかにそれは電気釜だった。だが、円筒状のフォルムも、外側の素材も、デジタル表示もランプも何もかも、古臭い。もともとは真っ白だったのだろうが、すっかり変色している。充電式のモデルのようだった。

「キビツ……だいぶ古い物のようですが」

貞三が指摘したのは、持ち手のところにある「K i b i t z」というロゴだった。正太郎の知らないメーカーだった。

「わしの爺さんの買うったもんじゃけ、もう六十年になるじゃろの。

おい」

この電気釜で何をしようというのか。笠田の意図がまったく見えない。

「爺さんは自炊が好きで、この電気釜を愛用しとった。キビツの釜は米が炊けるときにビビッと、警報機みたいな音が鳴りよるのが特徴じゃ。ところがあるとき、スーッと、蚊の鳴くような音しか出さなかった。翌日、婆さんが死んだ」

ぽん、と電気釜の持ち手に手を置く笠田。

「交通事故じゃった。それ以来、この釜が鳴らんかった翌日か翌々日に、笠田家の誰かに不幸が訪れるようになったんじゃ」

「不幸の予告をするんですか」

貞三が訊たずねる。

「そういうことじゃ。爺さんは死ぬとき、代々この釜を大事にせえと言ひ残した。大事な決め事があるときは米を炊いて、音が鳴ることを確かめるじゃ——とのう。それで笠田家では縁談が持ち上がるたびにこれで米を炊くということになつとる。俺とこいつんときも

そうじゃった」

笠田は妻を振り返り、「あんときは窓の外で鳩が飛び立つほど大きくゆう鳴ったな」と笑った。そしてすぐ彼は、正太郎のほうを向いた。

「まあ、そんなに堅苦しく考えんでもええ。単なる儀式じゃ」

堅苦しくなど考えていなかった。馬鹿馬鹿しい、と思うだけだ。

笠田は電気釜のスイッチを押した。オレンジ色だったランプが赤くなり、ディスプレイに【炊飯 30分】と表示される。

それから三十分、ほとんど笠田が一人でしゃべり続けた。

「……サーベルタイガーゆうは体も大きくてしぶとくての、ライフルの一発や二発では倒れん。おまけに足が速くて、距離を取らんで狙うとすぐに襲いかかってきよる。すごいスリルじゃ」

彼は五年前から、絶滅動物の復活プロジェクトに多額の出資をしているらしい。それで復活に成功したサーベルタイガーという猛獣もうじゅうを瀬戸内を買った廃墟だらけの島に放ち、自らライフルを持ってハンティングしているというのだ。

「サーベルタイガーもええが、今度はエピオルニスを放つ予定じゃ。婿殿はエピオルニスを知っとるかの？」

婿殿という言葉に、正太郎は威圧感を覚えた。

「いえ。存じ上げません」

「かつてマダガスカルにおった巨大な鳥じゃ。高さが四メートルも

あって、『アラビアンナイト』に出てくるロック鳥のモデルになったんじゃ。そうじゃの、衣空」

我が娘を見る笠田。衣空は「ええ」と小さく言っつうなずいた。

「でも、エピオルニスは空は飛べません」

「空は飛べんが脚の強さはものすごかった。そんな巨鳥の腹にズドンと撃ち込むことを想像しただけで、ゾクゾクするけえの」

ライフルを構える仕草をする笠田。正太郎は身震いを抑えるのに必死だ。巨大な鳥も、それを狩猟の対象とするこの男も、できれば関わりあいたくない相手だ。

「あなた、そろそろ」

笠田の妻が電気釜を指さす。ディスプレイには【炊飯 59秒】と出していた。

「本当じゃ。みんな、耳塞ぐ準備はできとるか？ 窓ガラスが割れるくらいの音じゃけ」

一人嬉しそうな笠田。ちらりと父の貞三を見ると、律儀りちぎに両耳のそばに手を添えている。正太郎は小さくため息をつき、ディスプレイを見つめる。30秒……20秒……

「十！ 九！」

十秒前から、笠田ははしゃいでカウントダウンを始めた。

「三！ 二！ 一……」

一同は次の瞬間、目を見張った。

……びし、びしびし、……しー

蚊の鳴く声どころか、ティッシュペーパーが引き裂かれるくらいの音しか出なかった。

3.

窓の向こうには、夕暮れの瀬戸内海が広がっている。

遠くかすむ島影は四国。波などほとんどない海の上、時間が止ま
っていないことを示すのは、白い波の筋を残しながら進んでいく漁
船だけだ。

おのみち
尾道タワーホテル、三十階のスイートルームである。

「腹が減ったな」

部屋の中を振り返り、正太郎は言った。キングサイズベッドに腰
を下ろした衣空は「そう」とだけ返事をした。

「昼間けっこう歩いたからな。空いてないのか」

「なんだか、気分が悪くって」

その顔はたしかに青白い。部屋の照明が落ち着いているせいかと
思ったが、そうではないようだ。

「風邪でもひいたのか？」

「違うわ。たまにとても疲れてしまうことがあるの」

膝の上で、小鳥の形をした土人形を弄もてあそんでいる。福岡で見つけた伝統工芸の土産品だ。笛になっており、弱く吹いただけでピロピロピロとかなり大きな音が鳴るのでうるさいと正太郎は思ったが、なぜか衣空は気に入ったのだった。

「こういう日はすぐ眠ることになっているわ。悪いんだけど、私、夕飯は遠慮えんりよさせて」

「そうか」

ルームサービスでも、と言おうとしてやめた。本当に具合が悪そうだったからだ。

「あなた、外で好きなもの食べてきて。私、一人で寝ているから」

「そばにしようか？」

「大丈夫。一晩眠れば気分もよくなるわ。明日の朝食は一杯食べるから」

にこりと笑った。その顔に、正太郎は安心感を覚える。気遣いのできるいい妻だと思う。

「わかった。それじゃあ行ってくるよ」

「ごゆっくり」

衣空を部屋に残し、正太郎は部屋を出る。閉まるドアの向こうで、ピロピロピロと弱々しい笛の音が聞こえた。

エレベーターで一階に降り、メタリックな雰囲気のエントランスを出ると、潮しおの香りに包まれた。少し歩けば道の複雑な住宅街に出る。

知らない町を一人で歩くのは悪い気分ではなかった。オレンジ色に染まる世界を歩きながら、正太郎はホテルに残してきた妻のことを考える。——見合いの日からもう、半年くらいが経つ。

……びし、びしびし、……しー

キビツの電気釜がティッシュペーパーを引き裂くような音を立てたとき、真っ先に立ち上がったのは笠田幹夫だった。

「こ、これはどうということじゃ！」

顔を真っ赤にして、彼は正太郎を睨にらみつけた。

「おどれ、おどれ……キビツの釜がこんなシケた音のはずがなかるうが！ 破談じゃ。この縁談は、白紙じゃ！」

戸惑いが行く先を失って怒りになっているようだった。正太郎はその劍幕けんまくに恐れをなしながら、言いがかりだろうと内心反発した。

「いや、ま、まさか。笠田さん、ご冗談を」

貞三もまた、困惑している。

「冗談など言うか！ 破談じゃ。信じとつたのに……」

「あなた、いいかげんにしてください」

笠田の妻が口をはさんだ。思いもかけない、鋭い口調だった。

「こんな古い電気釜がなんだというのです？　もう五年も六年も使っていないのだから、故障だってするでしょう」

「しかしだな、お前……」

「うんざりなの。ピラフもナシゴレンも作れない、蒸発水分除去もできない、そんな古臭い電気釜に何がわかるというんです？」

「貴子^{たかこ}、おどれ、慎めよ……！」

「いいえ慎みません。前代未聞の物流システムを作り上げ、絶滅動物の復活なんて新奇性に富んだプロジェクトに出資するあなたが、どうしてこんな古びた儀式にこだわるんです？」

「貴子……」

「これを機にやめましょう。こんな電気釜の占いなんて信じることはないわ。衣空^{つっし}だって正太郎さんのことを気に入っているのよ、ねえ？」

うつむいていた衣空は母親の顔を見て、ちらりと正太郎のほうに視線を向けた。そしてまたうつむき、恥ずかしそうにくくりとうなずいたのだった。

「正太郎さんも、そうでしょう？」

「ええ、そうです」

貴子に押されるように、正太郎もまた言った。

「ほら、決まりよ」

「そうですよ、笠田さん。決まりかけたことなのだから今さら反故ほごにはできません」

貞三も説得し、笠田が折れる形で二人は結婚することになった。

挙式は五か月後、厳島神社いつくしまで執り行われた。

「厳島神社は物流の神様じゃけえ、俺の娘の結婚式をするのに縁起がええのう」

見合いの日に取り乱したのが嘘のように、笠田は上機嫌だった。

白無垢しろむくに身を包み、うつむいた衣空は正太郎の目にも美人に見えたが、お互いのことを何も知らない結婚であった。

衣空と初めてゆっくり話したのは、その日、披露宴が終わったあとのホテルの部屋だった。

「忙しい一日だったわね」

ガウン姿でベッドに腰かけた衣空はそう言った。敬語ではないその態度に、正太郎の心の障壁しょうへきも溶けていった。

「ああ」

「見て、鳥居がきれいよ」

彼女が顔を向ける窓の外に目をやると、水の上に建っている鳥居がライトアップされていた。

「物流の神様だから縁起がいいって言ってたな。会社がさらに発展するといいいけど」

正太郎が言うと、衣空はくすりと笑った。

「物流の神様なわけないじゃない。きっと平清盛が海運の安全をたいらのきよもり祈念きねんして寄付したことを言ってるんだらうけど、もともとは宮島みやじまに住む女神の居所として造られた神社よ。陸上運送りやくにご利益があるとは思えないわ」

彼女の話聞いてるうち、正太郎の中で何かが変わっていった。

高校生のころから、何十人も女と遊んできた。だがどの女も、音楽かバッグか化粧品の話しかできないような蓮はす葉はな女だった。

俺は衣空に魅ひかれてる。そう、自然と思えた。

「今日から、夫婦だな」

「ええ……」

二人は見つめ合い、そして結ばれた。

結婚式が終わってから二人の距離は急速に縮まり、翌日からのヨーロッパでのハネムーンを心の底から楽しんだ。

帰国してからすぐに、正太郎は好待遇で《CASA DA 運送》の社員となった。そしてすぐに忙しくなった。全国のステーション視察である。

「なにせゆくゆくはうちの会社を背負って立つ男じゃやえの、全国のステーションがどんなところにあって、どんなふうにシステムが動いとるかちゅうのを見とかんことには」

笠田はぼんぼんと正太郎の肩をたたくのだった。

「なーに、そんな堅苦しゆうならんでもええ。行つた先々で上等のホテルを用意しとくけ、美味いもんでも食うたら。そうじゃ、衣空も連れていけ。新婚旅行の延長じゃ」

広島発の全国旅行の始まりだった。まずは大阪を中心に近畿地方を回り、静岡を経て関東を一通り。東北を北上して北海道を回り、北陸から中国、九州を経て瀬戸内へ戻ってきた。

社長の娘夫婦ということ、どこへ行つても歓迎された。ステーキやサテライトの見学はそこそこに、美味しいものを食べ、観光名所を巡った。立場に慣れない正太郎を、衣空は十分すぎるほど支えてくれた。正太郎の知らないビジネス用語もすらすら使いこなすし、観光名所では地元の社員の知識を凌駕する教養の深さを見せた。「素晴らしい奥さんで羨ましいです」。そう褒められ、正太郎も気分がよかった。

だが——と、全国を回りつつ正太郎の心に引っかけができていた。

何かが満たされない。

一つには、衣空との夜の営みのことがあった。初めはうぶな反応だったが、何度か繰り返すうちに正太郎を満足させるようになっていった。だがそれも数回のことだった。

飽きたのだ。毎回同じような夜をすごすのに飽きてしまった。

素晴らしい妻なのだとはわかっている。だからこそ、もう一度くらい別の女と——という気に蓋ふたがしきれなくなってくる。男特有の理不尽な衝動だが、その衝動に素直に生きてきたのだ。

自慢じゃないが、顔はいい。ベッドの上のテクニクだって自信がある。まだ三十だというのに、残りの一生を一人の女にだけ捧ささげろというのは酷こくではないか。

気づけば、尾道の空は藍色に染まっていた。

衣空といるときには抑えている気持ちだが、一人になるととめどなく心からあふれてくる。衣空じゃない女を、抱きたい。

「腹、減ったな……」

独り言が苛立っていた。胃が食い物をくれと悲鳴を上げている。どこでもいいから飯屋に入って何か食おう。しかし周囲にはブロックの壊れたような古い民家ばかり。

ふと鼻先を、ソースの香りがなでた。誘われるように歩いていくと、「お好み焼き」と書かれた暖簾のれんが目に入った。

引き戸をがらと開く。大きな鉄板が一つ。カウンターには六席しかない小さな店だった。客どころか店員もない。

「すみませーん。今行くから座っててー」

奥から若い女性の声が聞こえる。正太郎は引き戸を閉め、椅子を

引いて腰かける。

「すみません、どうもー」

奥から現れたのは髪色の明るい二十代半ばの女性だった。目と目が合った瞬間、正太郎の心臓がどくんとした。

一生に何度、こんなことがあるだろうか――。

彼女の目にも、正太郎に対する驚愕きょうがくまじりの好意が浮かんている。鉄板越しに交わされる無言の会話。正太郎は確信していた。

俺は今夜、彼女を抱くのだ。

4.

袖未は哀れな女だった。

十九歳のときに福岡で恋人の漁師の子を妊娠し、周囲の反対を押し切って結婚した。直後、夫の乗った漁船が海上保安庁の船と不慮の衝突事故を起こし、夫は死んでしまった。そのショックでお腹の子も流れてしまい、勘当されていたので頼れる身寄りもなかった。

死に場所を探して旅を続けているうち尾道にたどり着き、一軒のお好み焼き屋に入った。五十を過ぎた女将おかみに身の上話をするとうちで働きなさいと言われた。必死でお好み焼きの焼き方を覚え、店を手伝ううちに希望を取り戻したが、二度目の悲劇に見舞われる。

恩人であったお好み焼き屋の女将が、交通事故で死んだのだ。

再び悲しみの底に沈んだ袖未だったが、お好み焼きの味を継承しなければならぬと一念発起し、店を継いだのが二年前だという。

二十四歳にして自分よりも壮絶な人生を送っている袖未の運命に、正太郎は打ちのめされた。

華奢な体と大きな目。朗らかだが、その人生に裏打ちされた陰が漂っている。

正太郎は、袖未にただただ惹かれた。

小さなお好み焼き屋の奥の、すれた畳の部屋。その肌に触れた瞬間、正太郎の体に電撃が走った。掌に伝わる体温。喉に這う舌。激しい息遣い。生涯に忘れえぬまぐわいがあるのだとしたらそれは今夜のことだ。ねっとりとしたソースの香り、生地の焦げた煙、それにキヤベツから湧き出る水蒸気が官能的に正太郎を包んでいた。

ステーション視察旅行を終えて広島の本社に帰った正太郎は、すぐにシステム管理部門・山陽地方主任という肩書を与えられた。トラックの経路について常に最新の情報を整理し、あらたに追加すべき経路や廃止すべき経路を考えると、社内でも要となるポストであった。

給料はよかった。そして、必要に応じて全国のステーションを見

て回る出張の時間を取れた。

正太郎はひそかに袖未に生活費を送金した。さらに、店の近くのマンションを一室借り、住まわせた。そしてしばしば、出張の名目で尾道へ出かけ、袖未と逢瀬おうせを楽しんだ。

「ああ、来てくれてうれしい」

袖未はいつも満面の笑みで正太郎を迎えた。正太郎は先にマンションの部屋に入り、営業が終わるまで袖未を待つ。そして袖未が帰ってきたら、朝までめくるめく時間を過ごす。袖未といると、時間の進みがジェット機のように早かった。

出張先でのアライバイ作りはしっかりしているので、同僚も部下も、妻の衣空も、誰も袖未の存在には気づいていなかった。

「おかえり」

出張から帰ると衣空はいつも編み物をしていた。手芸に料理にフランス語……あくまで淑しとやかな趣味に没頭し、体を求めてこないことに頓着とんちやくしないその態度は、正太郎を安心させた。

逢瀬の行き来が三か月も続いたある日、いつものように出張を装って尾道へ行くと、袖未の店は閉まっていた。マンションへ出向くと、袖未はげっそりしていた。

「キャベツが手に入らないの」

一週間ほど前から、キャベツを届けてくれる業者に連絡がつかない

いのだという。しかたないと街のスーパーや八百屋を回るが、尾道のどこへ行ってもキャベツは入荷されていなかった。

「キャベツがないんじや、お好み焼きは焼けないわ」

「そうか……」

その翌日、正太郎は一度広島へ戻って日中の仕事をこなし、夕方にスーパーでキャベツを二玉購入して再び尾道へ向かった。二日続けたの出張を周囲は不審がっているはずだったが、袖未が困っているのにじっとしてなどいられなかった。

夕方の六時には店にいろ、キャベツを持ってくるから——袖未にはそう言ってあった。コインパーキングに駐車し、店に走った。引き戸をがらりと開く。

「袖未、キャベツ持ってきたぞ！」

紙袋を掲げる。まず目に飛び込んできたのは、鉄板の向こうの袖未の困惑した顔。そして、カウンターに腰かけた女の背中だった。

見覚えのある服だなと思って、ゾツとした。

「キャベツなんか、どうして？」

振り返ったその顔は、衣空だった。怒気も悲哀も軽蔑もない、ただ石のような無表情だった。

「岩清水いわしみずさんが、最近あなたの出張後の動向がおかしいって連絡をくれたのよ」

部下の名前だった。

「お金を払って尾行してもらったの。そうしたらあなたがこの近くのマンションに入っていったって。おかしいじゃない。尾道に知り合いなんていないでしょ」

相手がお好み焼き屋の女であることを突き止めるのにそんなに時間がかからなかった、と衣空は言った。

「だから私、会社に手を回して、尾道全域へのキャベツの供給を止めてもらったの」

「なんだって……?」

尾道市内にキャベツを生産している農家はない。日本を席巻するせっけん物流会社の社長令嬢に、キャベツの供給を止めることなど赤子の手をひねるようなことだった。

「案の定、あなたがスーパーでキャベツを買ったって、岩清水さんから連絡があったわ」

袖未の目は真っ赤だった。

「衣空……これは……」

「いいのよ」

衣空は落ち着き払っている。

「私があなたにとって魅力的な女ではないことはわかっていたわ」

「いや……けしてそんなことは」

「いいって言ってるの。会社どうしのつながりを作るための結婚なんて財界じゃ当たり前よ。夫婦に愛なんていらぬ。あなたが愛人を作ることに文句は言わぬわ」

衣空は正太郎の手の中の紙袋を取り、中からキャベツを出した。

「ただ、黙っていらぬのが癩しやくだっただけ。だから子どもみたいな意地悪をしたのよ。はい、袖未さん」

冷たい鉄板の上に、キャベツを置く衣空。

「美味しいお好み焼きを焼いてあげてね」

衣空は店から出て行った。その日、正太郎は袖未の部屋に泊まったが、とても彼女と体を重ねる気にはならぬかった。衣空の目に、その背後にある《CASA DA 運送》の目に、ずっと見張られている気がしていた。

「正太郎さん……私……」

寝返りを打ちながら、何度袖未は正太郎の名を呼んだらう。

「大丈夫だよ」

慰なぐさめの言葉が、瀬戸内の静かな夜の海に沈んでいくようだった。

5.

悲劇が起きたのは、その翌週である。

正太郎は仕事であった。本社のオフィスで岡山の搬送経路図の改定案をじっと見ていた。すると突然、袖未からのメッセージが届いたのだった。

——助けて。

胸中にとげとげしいざわめきが生じた。どうしたんだ、と送ったが返事はなかった。

「わあ、こりやすげえな」

三十分後、部下の一人がパソコンを覗き込みながら大声を上げた。「尾道で大火事だって」

すぐに彼のもとに飛んでいき、画面を眺める。もうもうと黒煙と業火の上がるその街並みを、正太郎は知っていた。

「袖未！」

「はあ？」

部下が正太郎の顔を振り返った、そのとき、

「伊沢正太郎はおるかあっ！」

怒号を上げながら、黒いスーツ姿の男が入ってきた。てかてかのオールバックの髪にサングラス。肩には木刀を担いでいるその男——見合いのときにいた、笠田の秘書、テツヤだ。正太郎の姿を認めるなりズカズカと迫ってきて、ワイシャツの首元をぐいとかんできた。

「おどれ、ツラ貸せやっ！」

テツオに連れて行かれたのは、本社十七階の応接室だった。入ったことのないその部屋の革のソファに座らされる。

ガラスのテーブルにモニターが置かれていた。

笠田幹夫が映し出される。背後の壁から見て、ログハウスのようなところにいるようだった。

〈おうおう、婿殿〉

口調こそ穏やかだが、目は日本刀の刃のようにギラギラしている。通話アプリでつながってるようだった。

「どうも……お義父さん……」

〈わしと、親子のつもりはあるようじゃの〉

眉毛がもぞもぞと、げじげじのように動く。

戸惑っている、笠田はモニターの向こうで、だん、と何かを叩いた。びくりと震える正太郎の肩を、ソファの後ろに立ったテツヤが押さえつける。

〈おどれ、衣空をずいぶん傷つけてくれたようじゃのお！〉

笠田の怒りで画像が震えた。

〈袖未ちゆう女のどこがええんじや〉

その瞬間、嫌な吐き気が込み上げた。

「お義父さん、お好み焼き屋に火をつけたのは、まさか……」

〈知らんけえ！ それよりどう落とし前つけてくれるつもりじや、

ああっ？

こちらの意見は聞いてもらえないようだった。だが正太郎は質さ
なければならぬことがある。

「そ、袖未は？ 無事なんですか？」

〈見せちやる。おい！〉

画角がぐっと広がった。笠田のすぐわきにパイプ椅子に座らされ、
手足を縛られて気を失っている袖未の姿があった。

「袖未！ お義父さん、お願いです。悪いのは俺です。袖未だけは助
けてください」

〈浮気相手の命乞いなんて、気分が悪いけえの〉

笠田は手を伸ばし、袖未の顎に降れる。

「お願いです。今後は、衣空さんを大事にすると誓います。袖未とは
別れ、二度と会いません。だから彼女は解放してやってください」

〈夫婦じゃけえ、衣空を大事にするのは当たり前じゃろうが〉

「……」もつともです」

ぺっ、と画面の中で笠田は唾を吐いた。

〈キビツの釜が鳴らんかったことがすべての元凶じゃろうが〉

あの古臭い電気釜が、正太郎の脳裏に浮かんだ。

〈本気で衣空とやりなおすつもりがあるんじゃないやったら、おどれ、わ
しの前でキビツの釜を鳴らさんかい〉

「はい？」

「へわしは今、ハンティング用に買った荻鯖島おきさばしまの中央ハンターハッチで待つとる。港からまっとうに来れたらちようど二十分ぐらいじゃけ。わしの前で釜を鳴らし、ほっかほかの飯を見せてみい。それがおどれの襖みぞじゃーん」

そのとき、室内の観葉植物の陰の扉が開いた。入ってきたのは、和服姿の笠田の妻だった。キビツの電気釜を持っている。

「うんざりなのよ、この電気釜」

モニターの横にそれを置きながら、彼女は正太郎に言った。

「でもこうなったらしょうがないわ。行ってきなさい、婿殿」

衣空によく似た無表情だった。

笠田の身内は誰も助けてくれない。やるしかないのだ。正太郎は電気釜を手に取り、立ち上がる。

「気をつけなさいね」

部屋を出るとき、背後から義母が声をかけてきた。

「島には、笠田が放ったサーベルタイガーとエピオルニスがいるか

ら」

荻鯖島は全体が木々に覆われた山のような島だった。かつて漁港だった港に降り立つと、小さな「ウェルカムセンター」があり、米と水が用意されていた。テツヤの指示でキビツの釜の中にそれらを入れ、蓋を閉める。

「準備はいいか？」

テツヤは鋭い目で訊いた。

「ハンターハッチという建物までの道のりは？」

「それも自分で見つけろや」

正太郎の手の中のキビツの釜に指を伸ばし、スイッチを入れるテツヤ。

【炊飯 30分】。

「笠田社長に炊き上がりのアラームを聞かせるんじや。それができなきゃ、おどれの女はどうなるかしれんぞ」

「お願いです、テツヤさん。どっちの方向かだけでも……」

きひひ、とテツヤは汚きたない歯並びの口を歪ませた。

「おどれみたいな、ええ顔立ちの男、わしゃ大嫌いじゃけんの」
あきらめるしかなかった。

ウェルカムセンターを飛び出し、十分のあいだに、サーベルタイガーに追われ、エピオルニスに蹴られ、崖を転落した。

——それでたどり着いたのが、この蔦にまみれた小屋だ。

ドアに鍵はかかっていなかった。

灰色の机が一つあり、右手の壁際に木箱とパイプ椅子がうずたかく積まれていた。奥にはスチール棚と黒板があり、「おぎさば自治センター」の文字がかるうじて読める。

テーブルの引き出しをあけるが、短くなった鉛筆の他には何もなかった。次いでスチール棚に残された書類をあさる。

「あった！」

島の全景が描かれたパンフレットが見つかった。「中央ハンターハッチ」は、この自治センターの裏手から伸びるつづら折りの道を上り、観音像の前の道を左に進むとたどり着くようだった。

机の上に置きっぱなしのキビツの釜を見る。

【炊飯 13分】。

地図を探すのに手間取ったが、急げば間に合うだろう。

何かの役に立つかもしれないと、立てかけてあった縦型掃除機を右手に持ち、キビツの釜を左手に抱えて外へ飛び出した。

エピオルニスの鳴き声はもう聞こえなかった。あたりの茂みに目をやる。サーベルタイガーの気配もない。

建物の裏手に回り、砂利の道を上り始める。

木々はかなり生い茂り、かつての道を塞いでいた。縦型掃除機を振り回し長道を切り開き、急ぐ。

「くそっ！」

これでは間に合わないかもしれないと思ったそのとき、倒木の向こうに、つる植物に覆われ、苔こけむした観音像が見えた。

「やったぞ」

倒木を乗り越え、観音像の前の岩に腰かける。キビツの釜のディスプレイは【炊飯 5分】となっている。

進むべき道は、今までとは違い、アスファルトがしっかり見えていた。そして百メートルほど先に、テントのような形をしたくすんだ灰色の廃墟はいきよと、その脇にある新築のログハウスが見えた。

「あそこだ……」

間に合う。早く行こう。

立ち上がり、二、三步踏み出した、その時だった。

ぐろろろろ！

右から飛び出してきた毛むくじゃらの塊に、正太郎の体は弾き飛ばされた。

「どぶっ！」

巨木に打ち付けられ、肺が押しつぶされそうになる。地べたに手

をついて顔を上げると、サーベルタイガーの黄色い目が正太郎を睨みつけていた。

一瞬の後、地を蹴ってその怪物は飛び掛かってくる。とっさに掃除機を顔の前にして防ぐ。サーベルタイガーの鋭い爪がそれを掴んだ。

ぐがおう！　ぐがごう！

上あごの鋭い牙がすぐ目の前に迫る。岩のような体重がのしかかり、腕が震える。

恐怖と後悔で、頭が熱くなる。

ここまでか……。あの物流ヤクザの娘と結婚したばかりに……。ぐるろろうっ！

サーベルタイガーはとどめとばかりに口をあけた。生臭いよだれが、正太郎の顔に垂れてくる。

そのとき、正太郎の右の親指がスイッチに触れた。掃除機は起動し、空気を吸いはじめた。

腕から重みが消えた。

サーベルタイガーは怯^{ひる}んでいる。この音が怖いと見える。

正太郎は立ち上がり、掃除機を獣に向ける。強度調節ダイヤルを動かし、「強」にする。音はさらに大きくなる。サーベルタイガーは自分が飛び出てきた茂みに飛び込んでいった。

ほっとすると同時に、電気釜がないことに気づく。

慌てて周りを見回すと、古びた松の木の太い枝の二股にすっぽり嵌まっていた。掃除機を捨て、電気釜を引っ張り出してディスプレイを見る。

【炊飯 2分】。

右手に抱え、ログハウスに向けて走り出す。

傾斜がきついとは思わない。だが、脚も腕も胸も痛い。どこで傷ついたのか、額から血が流れていて、右目に入った。

まるで水の中を走っているようにもどかしかった。気づいていないうちに時間がどんどんすぎているのではないかと、焦りで押し潰されそうだった。

ようやくログハウスに着く。流木で作られたらしき凝った形のノブを握り、扉を引き開ける。

「おおう？」

ソファーに腰かけた笠田がこちらを見ていた。周囲には三人の部下が控え、その向こうに……

「袖未！」

その名を叫んだとき、ぐらりと視界が揺れた。

固いフローリングに、両ひざをついていた。

「ほほう、来たか。婿殿よ」

笠田がニヤリと笑う。

憎い。この男が……。しかし、愛する女の命を救うには、これしか
……。

そのとき――。

音が、空気を劈つんざいた。

踏切の警報機などという生易しいものではなかった。災害か、あ
るいは戦争を思わせるような、体中の不安を震わせるような、悪魔
のけたたましさだった。

「鳴った。鳴ったぞ」

――【炊飯 0分】。

ディスプレイを確認し、這はうようにして笠田のもとにキビツの釜
を運ぶ。床にたたきつけるように置き、蓋に手をかけた。

「これで、満足か……」

呪詛じゆそのように言いながら、蓋を開けた。

炊きあがった米飯――など、どこにもなかった。濁にごったお湯と、そ
の中でふつふつと音を立てている米。これは、生煮え？

「どう……して……」

今さらのように、額の傷が痛い。頬を伝った血が、床にぼたぼたと
垂れている。

目の前でゆっくりと、笠田の体が立ち上がっていく。

「のう、婿殿。わしゃこういうのがいちばん嫌いじゃけえ」
顔を上げると、目の前に、ライフルの銃口があった。
「赤子なくとも蓋取るなあちゆうて、知らんのけ」

——銃声。

すべてが、暗くなる。

7.

「なあ、サブロー」

「なんだよ、手を止めんな。さつさと終えて帰ろうぜ」

「この婿殿……なんて言ったっけ、名前」

「正太郎だろ？」

「ああそうだ。こいつ、なんで蓋、開けたんだ？ まだ炊きあがりま
で五分もあつただろ」

「知らねえよ」

「お前も聞いたろ。『鳴った。鳴ったぞ』って、こいつ言ってた」

「……そうだな」

「何の音も鳴ってなかったよな。あいつ、何を聞き間違えたんだ？」

「エピオルニスの鳴き声じゃないのか？」

「聞こえなかったよ、そんなの」

「じゃあ誰かが思い切り笛でも吹いたか」

「そんな音も聞こえなかっただろ」

「冗談だよ。なに、むきになってんだ。だいたいあの電気釜、もう壊れてるって話だぜ」

「えっ、そうなの？」

「見合いの日に後片付けをしたら、まるつきり生煮えなまにの粥かゆだったってケンタが言った」

「じゃあ婿殿に助かる見込みはなかったっていうのかよ。社長は知ってて走らせたのか？」

「知らねえよ。とにかく、社長の気分を損ねたんだからもうしようがないんだよ。俺たちもへマしたらいつこいつと同じ役目になるのかわからねえんだ」

「わかってるよ」

「わかってるんだったら、手を動かせ」

(終)